

イケムラレイコ インタビュー

私は日本を非常に大切にしますが、それが世界の中で、世界をもっと大きく見た場合に、世界観を宇宙観まで広げた場合に、こういった私たちの存在という貴重さ、命の貴重さ、それから文化の歩みや歴史、いろいろなことが始まってきて、その中でアーティストが自分をどういう風にして位置づけるか、作品をどういう風にして築き上げるか。そういう努力はあったと思いますし、今でも歩み続けている努力です。

ヨーロッパの端で生活したのはとても大きい背景です。80年代にスイス、ドイツに来たときに、非常に私は無邪気だったと思います。それをずっと保ちたいと思っています。そういった心がけをしながらも、アートの世界で自分の世界を築くことの厳しさは80年代から非常に身に染みて経験しています。

私の場合は感情だけではなくて情緒、あるいは背景にあるポエジー、そういったものを保ちながら、何かのビジュアルな世界を築く場合に、一つの態度（アティチュード）が必要になってくる。どうやって仕事をするかというよりも、どうやって続けていくか。意味を保ちながら、どうやって仕事を続けていくか。続けていく中で、ただ、新しいものを求めるのではなくて、一つの organism の中で、外と意識しながら何かをクリエイトされるという。フォーマリスティックに見た場合に、一つの進歩がある。でも、進歩というのは A から B に移って行って、それが上に上がったり、下に下がったりとか、そういう意味ではなく、一つの心の状態であるということ。内向性を大事にしながらも、外をカチッと意識していく。だから、ヨーロッパで起こったこと、80年代の終わりに西と東が溶け込むような、大きな政治的イベントがあったということ、私は不思議なことにいつもそういう場にいるのですよ。60年代から始めると、学生運動時代でしょう。日本が非常に格闘の時代であった。その後70年代の半ばにスペインに渡ったとき、そこでフランコが死んで、いわゆる dictatorship が終わって、democracy が始まろうとして、その真ん中にいた。次はスイスに行ったのですが、80年代はスイスの初めての改革があった。若者の改革。いわゆるレボリューション的な。私もその中にいたわけです。その後ドイツに渡って、1988~1989年。その頃から本当に東と西がアンバランスになって、壁がバーツと崩れていく。その中にもいた。考えてみると、そういった歴史が変わる、るつぼの中にいた。ただ、不思議なことに、そうやって日本を離れながらも、ずっと日本を意識していたということは実際にあった。それが個人的な要素で、例えば、最初は父の死、次に母の死。そういったことと交わって、次が東北の災害。いろいろなことが日本とつながっている。

大事だったのはあの頃、70年代終わりに私はすごく世界を意識していたから、日本を去らないと行けない、日本を出国してからしか女性として、アーティストとして道を築けないという覚悟があったのですよね。今から考えるとちょっと悲惨ですよ。そういう背景があったから、それが自分の作品の中にじわじわと出てくると思うのです。私はいわゆる旗を掲げるようなフェミニストではないけれども、生き方はどのフェミニストよ

りもフェミニストだと思います。でも自分はそうだと言わない。言いたくない。自由とはそういうことから自由であるわけだから。

私が若かった時代は、変に西洋に迎合したり、あるいは対抗したり、非常に複雑な時代でした。60年代は学生運動の時代でしたが、私はその中に入りながらもしらけていた。反抗からものをつくれないと思う。私は日本の戦後は終わってないと思います。いわゆる平和というのは非常に大事だけれども、あの頃の傷、太平洋戦争の傷はいろいろな意味でまだ残っている。それを抱えながらも私たちは人類の愛や平和に、非常に希望が欲しいというか、希望を一つの人間の責任としてあると思うのです。それをアーティストとしてどのように生きるか。その場合、一つのモラリストというものだけではない。というのは、芸術と道徳は非常に難しいと思うのです。私たちは道徳者でもないし、教育者でもない。でも、そういった人類の重荷を引っ張って、自分の深いドロドロとしたものを引っ張って、それを中で見て、「ああ、恐ろしい」と思いながらも見つめていく。そういう勇気が私の仕事の原動力だと思うんです。

手で仕事をする場合は体で仕事をしているわけですね。体で仕事をするということは、頭もある。思考と体との融合が手を通じて仕事の原動力になる。ですから、ただの手仕事とすると非常に誤解が出てくる。いわゆる「工芸」ではない。アートの世界の微妙な違いの一つは、ただ美しいものを制作するというものではないということ。手という organ の一つの大事なところは、その融合性であるという。そこを基調にしながら、何かをつくっていただくだけではなくて、何かが生まれるという母体性を持つのが大事だと思います。だから物質を拒否するのではない。ものをつくる場合に、それが生まれてくることとつくることの意志の両方がつながったところに何かができる。その緊張がすごく大事だと思うのです。どういうことかということ、一つのコンセプトがあって、それを発注してつくと、思考どおりにになってしまう。そうではないことの自由というのは、例えばペインティングや彫刻など、いわゆるクラシックに見えるけれども、絶対にその存在性を失わないメディアだと思うのです。本当の意味での自己との葛藤。それを通じないと世界も分からないと思うのですよ。だからそこにいつも帰ってきて、見つめ直して、その中で自由を獲得していく。それは本当に一生かかっても終わらないことだと思う。

私の場合、80年代はドローイングの時代でした。最初はドローイングで自分を自由にする。そういうのは1979~1988年ぐらいまでは非常に強くあったと思います。ドローイングをどんどん何千枚も描いて、そこから一つの archeology、考古学的に自分の無意識の中に入っていき、文化の無意識の中に入っていきということをやっと続けて、一つの私の世界の基礎をつくったと思います。次の段階がペインティングにチャレンジすることで、非常に難しかった。ペインティングというのは自由の道だから、私たちはなかなか自由になれないのですよ。いろいろなことが邪魔するわけです。それがペインティングで一番見られる。まだまだ至らない自分というものがはっきり分かる。それだからこそ私は続ける。

今までは一つのエレメントを個別的にやってきたと思うのです。80年代のドローイングの世界では、いろいろなものがぐちゃぐちゃになりながらも、物語性を持っていて、それがドローイングという形でとにかく即興的にできるというメディアだった。80年代ではドローイングを通じて語ることができたと思うのです。次の発展が、それを reduce して、一つ一つのエレメントをもっとはっきりと自分から伝えていって、一つのイメージが一つの内容であると。それに私は20年間ぐらい努力したつもりです。その中で、少女であったり、子どもであったり、あるいは動物であったり、あるいはヒブリート（ハイブリッド）の。そういったものが私に人生の中で、いろいろな時代、エポックがあって、そこで一つの要素をつくりあげていた。最近になって、特に2011年の後は何か自分の中で変化した。そこから非常に思うのは、自分のユニバースをつくっていくという。いわゆる「製品づくり」ではないと、はっきりと私は考えるのです。一つの思考です。哲学でもある。それをアートを通じてどう大成していくか。非常に野心的なものですが、それに努力しています。

今の人たちってペイティングを観るような余裕を持っている人が少ないと。みんな動くものつられるから、映像がアートの世界にも非常に入ってきている。マチエールなんかを気にしている人って少ないのではないかなと。それを持てほしいと思うのですよね。私の場合、わざとザラザラとした垂鉛とか。少し時代に反しているようですが、アルカイックな、本当に時間を越えたところにある何かに触れてほしい。だからああいった彫刻もする。私は時代がこういうふうに行くからそれと一緒にトントンと行く必要は全然ないと思うのですよ。アーティストだからこそ、まったく逆を行ってもいいわけですよ。でも、やはり今の時代を意識していないと駄目。

空間をつくる場合でも、なるべくそこに人が入ったときに、「あ、これはなんだろう」という感覚で見たいと思うのですが、私はあまりマニプレート（操作）したくない。わざとらしく隠したりとか。だから、観てくれる人が観てくれればいい。時間というのは、誰かがザザーッと画廊に入ってきて、「何分いるからあの人を観た」というものでもなくて、もしかしたら10年ぐらい後で、「ああ、あのときなんか変なもの観たな」というふうに思い出してもらってもいいかなと。

2017年6月24日 ベルリンのアトリエにて

本インタビューは下記の機会に収録されました：

イクムラレイコ「あの世のはてに」2017年9月9日(土) - 2017年10月7日(土)、シュウゴアーツ

インタビュー動画をシュウゴアーツのウェブサイトでご覧いただけます。

